

＜今日の説教のポイント ルカによる福音書 23 章 50-56 節 ＞

1 埋葬について記す意味 — 屈辱から栄光に移る中間の出来事に注目

イエス様の死と復活が大事な出来事であることは分かります。しかし、埋葬についてここまで詳しく記す理由はあるのでしょうか。十字架の死は屈辱の極みです。イエス様は死んでそれを経験されたのです。そのこと（死）を保証するのが墓に埋葬された報告記事です。

2 アリマタヤのヨセフの登場に何を見る？ — 神様の働きを見る！

よって暗さに満ちた埋葬の記事ですが、ヨセフの登場でそこに光が差し込みます。放っておかれて不思議ではないイエス様のご遺体。しかしヨセフが危険を覚悟で引き取りを申し出ます。さらに、敬意を込めて新しい墓に埋葬します。それはこの先に神様が用意されている、人間の予想を超えた恵みの出来事（復活）を指し示すような行為です。宗教改革者カルヴァンは、このヨセフの勇氣ある行為は神の（御霊の）働きがあったからこそ成し得たのだと強調します。人間ヨセフを見つめて終わるのでなく、神様が働かれる時それは成るといふ所まで考えなければならぬことを教えられます。

3 「神の国を待ち望んでいた」ことが彼の行為を可能にした！

カルヴァンは同時に、人間ヨセフが「神の国を待ち望んでいた」ことにも注目しています、このことこそが彼の義の行為の源泉だと。「神の国」の「国」は「バシレイア：支配・統治」が元の意味です。よって、ヨセフは神様の義なる支配が行き渡った状態（神の国、天国）を待ち望むと同時に、今からその神の支配に従った生き方をすることに取り組み始めていたのです。だから議員であるとか、金持ちであるとか、普通ならそれらを失うことを躊躇させる行為（イエス様の遺体を引き取り、丁寧に葬る）も恐れずに行うことができたのです。今日はたまたま「召天者を覚える会」を礼拝後に持ちますが、意図せず、それにふさわしい聖書の箇所を読むことになりました。罪無きイエス様を祭司長やファリサイ人らによって扇動されて殺してしまった雰囲気はまだ漂う中、ヨセフは神様の義を見つめ、またそれを望み続けたが故にこのような行動が取れたのであり、またその彼に神様が働き続けて下さったのです。私たちも、召天者が神の国で待っていることを思いつつ、神様の働きが成る道を歩み続ける者でありたいと思います。